

周休竹溪

安永4年(1775年)－嘉永7年(1854年)

周休は、安永4年(1775)に群馬県勢多郡持柏木村(現・渋川市赤城町持柏木)の草葉姓の家に生まれました。

5、6歳の頃は他の子どもと同じように一日中遊び回っていましたが、10歳の頃には身体が虚弱となり、天明5年(1785)には剃髪し、極楽院西善寺の二十五世周弁の弟子となりました。「周休」の名は、師の周弁から一文字賜ったものと言われています。

その後は、寛政7年(1795)に江戸にある東叡山学寮で仏教や経史等を8年間学んだ後、文化元年(1804)に渋川の遍照寺の住職となりました。号の「竹溪」は、遍照寺の南の小溪谷に竹が数多く生えていたことが由来とされています。

住職となって9年後の文化9年(1812)、遍照寺は火災で全焼してしましますが、再建して心身ともに余裕を得た後は、詩を作ることを楽しみとしていました。日常生活の中でも、弟子や知人から季節の物を贈られた時は、喜んでその情を詩にして謝意を表しました。また、干ばつや大雨で収穫が激減した時は、自分のことのように同情し、長詩を作って慰めていました。文政13年(1830)には『竹溪小稿』、天保8年(1837)には『小稿続篇』といった作品をのこしています。

天保13年(1842)には遍照寺を退き、石原の石原寺に移りました。2年後には中村の延命寺へ移り、嘉永7年(1854)にその生涯を終えるまでの日々を過ごしました。幼少期から多病であった周休は、「医学もよく研究し、近隣に貧しく病む者人がいると無料で診断し投薬しつつ、その知識をもって自らの寿命を80歳まで保つことができた」と言われています。

周休竹溪の略年表

西暦	和暦	年齢	できごと
1775	安永4	1	群馬県勢多郡横野村(現・渋川市赤城町持柏木)に生まれる。
1785	天明5	11	西善寺にて剃髪し、周弁の弟子となる。
1787	天明7	13	檀林郷校に入り、8年間仏教を学ぶ。
1795	寛政7	21	上野東叡山学寮に入り、8年間仏教や経史等を学ぶ。また、この頃、佐々木琴台に漢詩を学んでいた。
1804	文化元年	30	遍照寺の住職になる。
1812	文化9	38	遍照寺が火災に遭い、全焼する。
1817	文化14	43	遍照寺の客殿、庫裏を再建させる。その後も寺内を整備した。
1830	文政13	56	『竹溪小稿』を刊行する。
1837	天保8	63	『小稿続篇』を刊行する。
1842	天保13	68	遍照寺を退隠し、石原寺へ移る。
1844	弘化元	70	延命寺へ移る。
1854	嘉永7	80	延命寺で死去。遺骨は遍照寺に葬られた。

○主な参考・引用文献

『群馬県勢多郡横野村誌』群馬県勢多郡横野村誌編纂委員会(昭和31年9月10日発行) / 『江戸時代の渋川に生きた周休上人の詩的世界』しながわいほう ちょ (平成25年6月1日発行) / 『渋川市誌第2巻』渋川市誌編纂委員会

○年齢は数え年です ○年代は前後することがあります
※この年表は、渋川市誌をもとに作成しました
※没年月日は、延命寺門前の周休塔の刻字を参考にしま

周休と漢詩

周休は、幼い頃はわんぱくでしたが、10歳頃から体が弱くなり、ひとりで物思いにふけり、「幽寂」(奥深く物静かなこと)を好むようになりました。11歳の時に両親の快諾を得て、西善寺(赤城町持柏木)にて祝髪(髪を剃って仏門に入ること)し、周弁の弟子となりました。

その後、仏典以外にも様々な勉学に励み、漢詩においては、時には師として、時には雅友として、当時の名士と交流を行いました。遍照寺の住職となっても、寺務の合間に吟詠にふけり、自身を慕う人々と互いに詩を贈り合いました。

文化9年(1812)に遍照寺が火災に遭ってからは、寺の再建まで文筆や吟詠をやめました。再建後は心身に余裕が生まれ、吟詠を楽しみました。周休の作品は、50歳を越えてからのものが多く、文政13年(1830)に『竹溪小稿』、天保8年(1837)に『小稿続篇』等を刊行しています。

周休は漢詩に対して、「詩は高尚な精神を詠むもので、この一作ですべてを尽くしている。ただ真情に近い作が真の詩である」と述べており、その作品は、江戸後期に活躍した漢詩人の菊池五山や梁川星巖を始め、多くの名士から高く評価されました。

○主な参考・引用文献

群馬県勢多郡横野村誌編さん委員会(1956)『群馬県勢多郡横野村誌』

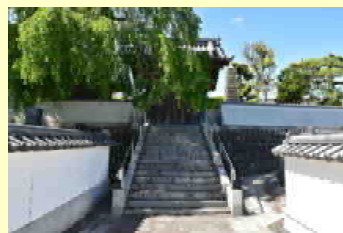
周休が住職をつとめた寺

遍照寺

(並木町)

①38年間を過ごした 光明山 常楽院

文化元年(1804年)、周休30歳で遍照寺第12世住職となりました。文化9年(1812年)、38歳のとき、病床にいて寺の火災にあい、過去帳は取り出されましたが寺は全焼。好きな文筆も吟詠も慎んで、ひたすら寺の再建に努めました。再建後、68歳までを遍照寺で住職をつとめながら、旅に出て名勝・古跡をたずね、また、文人と交流。多くの漢詩を詠じました。



<周休がのこしたもの>

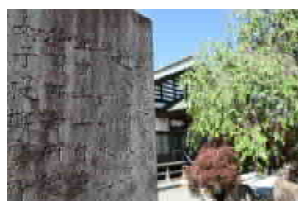
・周休寿塔 (寿塔: じゅうとう=生前に建てた塔)

本堂の前方、西脇にあります。周休が天保7年(1836年)に自身の寿塔をつくりました。正面に光明十有二世豎者法印周休塔、側面・裏面に「無學道人傳」と記した自伝で自ら撰文。友人で当代随一の書家と言われた越後の巻大任(菱湖)の書により刻字されています。



光明十有二世豎者法印周休塔

学びに未だ其の要の有る所を窺ふことを得ず…即ち此の自ら無学と称する所以なり



「無學道人傳 道人名周休…」
寿塔側面・裏面の三面に、周休の生い立ち、遍照寺の再建に尽力したこと、仏典のほかに各方面の学問も勉強したが最も漢詩に熱心で多くつくったこと、無学と称した所以など周休が自ら撰文した自伝が刻字されています。(刻字されている原文は漢文、句点無し、旧字です)

(引用・参考文献 横野村誌)

天保七年丙申夏四月

新潟巻大任書

無學道人伝
道人名は周休 字は無學 俗姓は葉氏 上毛勢多郡柏木の里の人なり、幼にして幽寂を愛し、群兒と遊嬉せず、年甫めて十一、自ら里の極楽院に詣り、薙髮して僧と爲る、院の住持周師は碩徳の人なり、其の幼にして道に志せしことを憐れみ、予を撫すること子の如く、提撕すること至らざる所なし、東西遊方して、勤苦すること亦年有り、然れども根機鈍滯にして、僅に其の崖略を得るのみ、竟に円頓真如の實際に超え入ること能わざるなり、又旁々外典及道藏を窺がい、凡そ遇ふ所あれば必ず瀏覽す、性尤も詩に耽けり、頗る題詠あり、壮年にして東叡より歸りて、錫を洪川の遍照寺に挂く、經禪の暇、行きては吟じ、座しては嘯ぶく、從遊するもの亦多し、互に相唱酬して以て娛樂と爲す、是の如くすること十年なり、偶ま舞馬の禍に罹り、寸椽も遺すなし、是に於てか土木の役に從事せざるを得ず、数年の間、拮据執筆し、管城御せず、詩囊も從う無く、爽然として自失す、影を顧みれば復故の吾れに非ざるなり、既にして宮建粗全く、栖托從ふ所を得たり、是れより後、風を嘲けり月を弄し、悠爾として自適し、塵事の其懷に(かゝる)を知らざるなり、今は已に老いたり、頭顱蒼然たれども、猶且つ鬚を撚り頤を支えて、推敲して休まず、嗟乎嗜好の深き、未だ碧雲佳句有らず、湯沐の流と謂わざるべけんや、但し其学ぶ所、駁雜にして曼衍、統紀有ること無し、以て憾みと爲すのみ、嘗て其徒に謂て曰く、吾の学に於けるや、乍仏にして乍儒、或は莊、列、或は医卜、亦惟泛然として涉獵せり、学びに未だ其の要の有る所を窺ふことを得ず、故に身を終る迄事に従ふも、未だ学ばざるものと、以て異なることなし、即ち此の自ら無学と称する所以なり、居常麻衣草坐して、未だ嘗て知らるゝことを僧綱、紫緋の流に求めず、塔を寺門に起し、自ら、終に僻壤に老ゆ著わす所竹溪小稿若干編あり、之を篋衍に蔵すと云ふ、釈、周休撰

・本堂

周休の代に再々建された本堂が現存。妻入で豪華な彫刻を組んだ唐破風の向拝部があります。向拝部には高橋蘭斎揮毫による扁額が掲げられています。



高橋蘭斎揮毫による扁額

「竹溪」について… 遍照寺の南には、戦国時代に「洪川の寄居」といった城址がありました。この寄居のかつての外郭に深さ数丈(1丈は約3m)、長さ百余間(1間は約1.8m)の小渓谷があつて明治初年までは竹林が茂っていたと伝わっており、周休は竹が茂る溪谷の景色から「竹溪」と号したのでは…と考えられています。

～遍照寺から石原寺へ

② 2年間を過ごした

光徳山

孝顕院

石原寺 (石原)

天保13年(1842年)、周休68歳のとき、
遍照寺を退隠し石原村の石原寺住職となりました。石原寺に移ったあと、「退光明山寺」「石原新居」などを詠じました。



石原村へ転居した頃に周休が詠じた詩 (『小隠集』巻上)

附碧菜正
與瑠花是新
山璃麥春居
僧地浪光所
詩黃滿欲見
幾金平盡
篇界田天

時此杯厨樹苔再一
有閒如不古蒸来宇新
山幽常妨池林ト蕭居
禽趣禁空頭下地然雜
喚無酒農洗題亦傍詠
午人家園硯詩因竹
眠問懸近泉虞縁邊

只老移新
待来松命石
風不幾山原
濤望樹僮新
月千傍修居
影霄柴竹
時色扉籬

弄自後同
花怪輩遊
嘲病少墳
月翁年墓
半猶皆多
生未抱拱
癡死兒木

野如麻本
鶴何衣一
山林草
猿下坐瓶
惜經足鉢
別年容鉢
頻久身人

退光明山寺

官米私米
貧吏富小民窮
為魚與困清水
為龜曳尾泥中

『小隠集』巻上

この頃詠じた詩とともに小隠集には俚歌(りか：世間の流行歌)を入れており当時の世情をあらわしています。周休のおもしろいも同じだったからでしょうか。

※「尾を泥中に曳く」

そうじ しゅうすい
莊子「秋水」：士官を求められた莊子が「龜は殺されて占いの具として珍重されるより、泥中に尾をひきずってでも生きている方を望むだろう」と答えた故事から。

仕官して束縛されるより、貧しくとも自由な暮らしを望むたとえ

※小隠集の詩は国書データベースに掲載されている「小隠集」から書き写しました。異体字などの解説・漢字変換の誤り等がありましたらご容赦ください。

<周休も眺めたであろう…石原寺付近の水辺の景色>

石原寺敷地内に、金井岱路(加舎白雄の門人)が寛政12年(1800年)に建立した芭蕉句碑「草の葉を落るより飛蜚哉」が残っています。また、明治19年(1886年)に大山祇神社に奉納された石原八景詩の一つに、当時の石原寺あたりでの川辺でのひとときを小淵信義(堀口藍園の門下生の一人)が詠じた漢詩「坊川暮色」があります。周休が石原村に暮らしていた頃、石原寺の近くには清い水辺があり(芭蕉句碑が建てられた当時の場所は石原村室(坊)川の清水際という)、周休も、蜚が飛ぶ夏の夜や雪がちらつく夕暮れ時の川辺の景色を楽しんだことでしょう。

石原寺に残る芭蕉句碑



～石原寺から延命寺へ

③ 10年間を過ごした

早尾山

薬王院

延命寺 (中村)

弘化元年(1844年)、周休70歳で中村の延命寺住職となりました。心に感ずるがままに吟詠に耽り、旺盛な作詩活動で、『竹溪三集』、『小隠集』を発刊しました。周休を師とし儒学及び詩文を学んだ堀口藍園は、疑問に思うことがあると夜中でも延命寺を訪ね教えをこうたと言います。



・周休塔

延命寺門前左側に「^{りつしやほういんしゆうきゆうとう}堅者法印周休塔」が建っています。
裏面に周休の没年月日が刻字されていることから没後に建立されたと考えられます。



（梵字）堅者法印周休塔



（表）
梵字部分拡大
（裏面）
嘉永七年寅天二月四日寂

※堅者：（仏）論議の席上、出された論題に
対して義を立て、質問者に答える僧
※法印：（法印大和尚位の略）最高の僧位

周休の晩年

70歳を過ぎ、全くとくの大悟徹底の域に達し、塵縁その心身を煩わすものもなく、奉仏のほか閑雲野鶴を侶として、時に心に感ずるままに吟詠に耽り、超然として世外に遊び真に高僧、智識の生活を営んだ「自ら貽る」と題してその心情を詠って曰く…（横野村誌より）

何ものにもとらわれない
心の赴くままに。

嘉永7年（1854年）2月4日、
周休80歳で遷化。
遺骸は寿塔がある遍照寺へ…

「高臥す雲山木石の居
人生の一夢空虛に属す
已に骨肉の心念を煩わす無し
豈に利名の毀誉に關る有んや
筐に満つるの詩編は糟粕を甘んじ
半溪の松竹は樵漁に混ず
老い来つて何ものをか疎懶に供す
月に嘯ぶき風に吟じ綏て自如たり」

上記のほか周休ゆかりの寺々

・柏木山 極楽院 西善寺（持柏木）

天明5年（1785年）、周休11歳のとき、剃髪して西善寺周弁和尚のもとで仏道・学問を修業。師の名を一字もらって周休とした。

・威徳山無量寿院 眞光寺（並木町）

周休は眞光寺42世順海（寛政元年（1789）6月入寺－寛政8年（1796）7月13日逝去）に学んだとされ、周休が天明7年（1787年）から入って8年間仏教学を学んだ「檀林郷校」は眞光寺と考えられる。

・東叡山 寛永寺（上野）

寛政7年（1795年）、周休21歳のとき、江戸へ出て東叡山学寮に入り8年間仏教や経史を学んだ。この頃佐々木琴台に漢詩を学んだ。

○「渋川郷学 周休竹溪頭彰展」開催にあたりお話をおうかがいした人、おもな引用及び参考文献等

遍照寺ご住職 長谷川広順様、延命寺ご住職 寺川行厚様、石原寺ご住職 千葉照峰様

渋川市誌第2巻、横野村誌、無学集、石像物と文化財、郷土渋川第9号、郷土渋川第20号、小池末廣著「渋川市・北群馬郡の寺子屋師匠たち」、群馬の古寺北毛編、昭和60年渋川郷土カルタ刊行会発行「渋川郷土カルタ」、渋川市HP「旧 渋川市地区の指定文化財」、広辞苑

※周休年譜は、原則として、横野村誌に記載されている情報を参照。ただし、遍照寺の住職についた年は渋川市誌を参照。また、没年月日は延命寺周休塔裏側に刻された「嘉永七年二月四日」としました。